

奥書

此度法華寺略誌を発行しようと考え、総代、世話人の方々に相談いたしました。同意を得て識者を編集委員に要請してさて取りかかる段階になって、本当にむづかしいことを始めてしまったことに気がつきました。資料の収集とか基本のことから間口は広くしぼり込むのに苦しみ、前回発行された中村謙藏氏著の「法華寺略誌」を踏襲することにいたしました。これとてあまりの格調の高さに平易な現代文に置き換えることができませんでした。仏教語とか当時の言葉使いはそれだけで日本の文化であろうと敢えてこれを換えないでそのままに印刷することにいたしました。夏目漱石の「吾輩は猫である」の文章のような感じがする中村謙藏氏の筆致です。氏は本化聖典大辞林という三冊一セットの仏教大辞典を座右に置き日蓮大聖人御遺文講義数十冊、大正新修大藏經八十冊などを読破された偉丈夫です。現役の盛岡市長を部下の引責辞任で退きようやく時間の余裕ができて略誌を手掛けられたのです。六十年以前に発行した本は立派なものでした。法華寺と以信院の成立のあたりには石川家等との関係があるのですがお寺の歴史の中には何処のお寺もこうした旦那（サンスクリット語でダーナ）いわゆるパトロンがいたものと思われ、藩公から寺領や寺録を受けないで不受不施のような立場を保たれたのではないかと考える次第です。南部家も先祖が身延山を寄付したり、利直公が蒲生氏郷の養妹を正妻としたことから幕府の注目を引いていたと考えられ源秀院殿の墓はお城と菩提寺の丁度真中に位置する所に作り豊臣の恩顧を受けた武将のたとえ養妹でも扱いは慎重だったようです。量的には多くないのですがその背後を観る（心の中まで見る）と実に数多くのが語られています。中村翁は朝早く（多分五時頃）お寺に来て拝まれたとのことでしたが、本堂の戸が開いていないと向拝に立って大きな声でお経を唱えて帰られたそうです。これは先代日昌上人

が晩年話されたことです。三十代の住職はあわてたことゝ思いますが、これを読んだ方は真似をして下さい。できれば昼にきてお経を読み覚えて朝に備えて下さい。法華経はお釈迦様が私達に遺して下さった至上の文章です。七百遠忌の時はお経本一千部をお配りしました。この本は二千部刷ろうと思っています。開宗七五〇年にもお経本をお配りしたいと考えています。どうか法華経を手に取り親しんで下さい。そして平和な世界を一人一人の力で築いて行きたいと思えます。お寺の主人公は檀信徒の一人一人です。これをもって奥書にいたします。